

6月8日 OMC 勉強会 事例検討会

テーマ：遠くから来た家族

テルイさん 85歳女性

テルイさんは85歳の女性。認知症を患っていたものの、自宅で次男夫婦がサポートし、生活は続けられていた。しかし、この1年間は元々良いとはいえなかった腎機能が徐々に悪化。維持血液透析も視野に入れて入院したものの、認知症の症状が一気に悪化し、経口摂取量が低下してしまった。点滴などを行っても状態は改善せず、腎不全と認知症の終末期と判断され、入院中の主治医から次男夫婦へ「余命は1～2週間でしょう」と告げられた。相談の結果、維持血液透析の導入は行わず、「最期は住み慣れた自宅で過ごさせてやりたい」との次男の想いから自宅で看取る方針となった。

しかし、自宅に戻るとテルイさんは少しずつ食事を摂るようになり、認知機能もやや改善した。ただし、十分な摂取量とは言い難く、このままだと徐々に衰弱はしていくことが予想された。再度、次男夫婦へ透析導入や胃瘻造設の希望について確認を行ったが「また入院して具合を悪くしたくない」とのことで、このまま自宅で最期まで過ごす方針となった。

しかしある時、遠方に住む長男が訪問診療に同席し「このままだと死んでしまう。腎臓を良くしたり、栄養を取らせる方法があるなら何でもやってほしい」という希望を申し出た。長男は会社経営者で金銭的な援助を長年にわたって続けており、次男の生活も長男が支援していた。さて、この事例に対して、援助者としてどのようなアプローチが可能だろうか？